

「江戸っ子」の「見解書」としての『阪神見聞録』

——谷崎潤一郎『阪神見聞録』全文分析による仮説提議

「大阪」の混同とその理由——

はじめに

藤原智子

大阪の人は電車の中で、平気で子供に小便をさせる人種である、

——と、かう云つたらば東京人は驚くだらうが、此れは嘘でも何でもない。

『阪神見聞録』（『文藝春秋』大正14年10月号初出）の冒頭である。

谷崎潤一郎は関西に移住後、関西を舞台にした作品を次々と発表し、高評価をうける代表作の数々が生まれていく。谷崎文学は関西で大きく開花したと評価されるゆえんである。

その素晴らしさを数々の作で世に知らしめた功績は偉大であり、その文学的成功を見てもこの両者の出会いは互いにとって恩恵と成功をもたらしたといえる。関西の地に心酔し賛美者として、またよき理解者として高く評価される谷崎であったが関西移住2年後の大正14年にはこのような随筆を残しているのである。

「江戸っ子」の「見解書」としての『阪神見聞録』

谷崎潤一郎は東京に生まれ東京に育つ。しかし、大正12年の関東大震災により、38歳でやむなく関西への避難を強いられる。当初はあくまでも便宜上、一時避難のつもりで来たにすぎなかったが、やがてその地に魅せられ30余年住むこととなるのである。

(傍線・筆者)

「かう云つたらば東京人は驚くだらう」、と一文目に記されている。

「阪神」見聞録」と題しながら、意識は「東京人」に向けて発信されているということが露顕しているといえる。冒頭のこの一文は実にこの作品を集約していると思える。全編を貫く二つのがすでにこの一文の中に提示されているのである。

その二つとは、まず、谷崎が「関西」にいかなる認識を抱いていたかということ。そして特記すべきもう一つはこれがまさに「江戸っ子」の自負とプライドに立脚した「江戸っ子」のスタンスで書かれたものであるということである。読み終えて冒頭に立ち戻ると、実に端的に主張内容と書き手のスタンスとが同時に明示された一文である。その意味で冒頭のこの一文は、よく全体を物語っている。

全文分析を通して、そのことを説明するというのが本論の目的であるが、それがすでにこの一文目にあらわれているのである。つまり「大阪人」を見る自らの視線が「東京人」のものであって、判断は「東京人」のものさしでなされていることの証左である。かつ、それが普遍的なものであるという確固たる自負に基づいている。関西の地にあるものの、終始「東京人」として、また「東京人」が共通して有している判断基準に基づいて発言しているといえる。

「大阪の人は電車の中で、平気で子供に小便をさせる人種」というのは語気の強い始まり方である。谷崎自身も後年の随筆『私の見た大阪及び大阪人』※（『中央公論』昭和7年2、4月号初出）で認めるとおり、強い反発を呼び「忘れない」ほどの「憎しみを買った」のも道理と言える。（※この中には「関西の風土人情に対して」「愛情が日増しに深くなっ

てゆく」と述べる箇所があり、「第二の故郷たらんとする京阪の地への愛情」ゆえの「批評」であることを「断つて」いるのも『阪神見聞録』と照らし合わせると対照的で興味深い。

しかし、本論で問題にしてゆくのはそういった関西人批判部分ではない。例を挙げると、むしろ重要視するのはその後が続く「かう云つたらば東京人は驚くだらう」の部分である。つまり、関西人に対する批判部分でなく、それに対して「東京人」または「東京人」のモラルや見識を引き合いに出してくるという、この随筆の構成手法に着目したいと思う。この手法こそまさに認識のあらわれでないかと思うからである。

この作品には、文章にある規則が生まれているのがわかる。

その規則というのは、後の章に表に示すが、「見聞」的記述で「関西（人）」を描いたあと、それに「東京人」的「見解」が続いて組み合わされていることである。「見聞録」というカテゴリーにあれば「見聞」部の後に、「見解」的記述がそえられるのは構造上、不自然なことではない。

しかし、その「見解」がいわゆる一「個人」または一「常識人」としてでなく、一「東京人」とことわってなされている点の特徴なのである。そしてさらにそれが前述のとおり「東京人」へ向けられるといった手順をふむのである。この二つの特徴は非常に重要なポイントといえる。

続くエピソードのひとつに「満員電車」で「女親が幼い子供に小便でなく糞をさせて」「念入りにも車台の床へ新聞紙を敷き」「お客の鼻先へ高々と翳して」「窓の外へ捨てた」という描写があるが、本論で問題にしてゆくのはそのあとに続く「甚だ尾籠なお話で、東京人には恐縮である」の部分である。

明記されている通り、「見解」が「東京人」にむけてのものであることが指摘できる。

そして、それよりもさらに、谷崎の意識がうかがわれるのが、次の点である。

無駄のない、また余計な配慮を入れない客観的な人物描写をしたあとで、それが「東京人」に対する下りになると前置きに「甚だ尾籠」で「恐縮」ということわりを入れてある点。そして「話」でなく「お」をつけて「お話」としている点であり、文の調子が変わるその背景がうかがい知れるところである。また、「尾籠な」「お話」の客観「的」描写であるが、客観的に見えて、実はどこどころに「念入りにも」「お客の鼻先へ」高々とといった皮肉をこめた、主観がなせる効果的な修飾がほどこされている点も見逃してはならない。

指摘したいのは、「見聞」、つまり関西人への厳しい描写及び描写「内容」でなく、それを受け、東京人たちに同意、賛同を求めるといふ反射的行為そのものである。そして、その行為は返答または同意を期待しながら求めたものでなく、必ず同意がなされるといふ確信に基づいている。なぜなら、この時点で彼は同じ判断基準を持った「江戸っ子」の一員であり、その「同類」の解釈は普遍的なものと理解されているためである。例外は考えに含めていないのである。

関西に於いて疑問を感じ、それを一「個人」または一「見識人」としてでなく、一「東京人」として受容し「東京人」へ向けて発信して自己の見解を普遍化しようとしている点が興味深い。

今回、作中「見聞」部に描かれた「関西人」の言動については、極力、見解をさしはさむことを差し控える。そして、その内容の真偽・善悪のほどについて詮議するのも控える。その理由は、先のように、それに導かれる「見解」部分の方を重要視するため、そういった作業は意味を持たないからである。

しかし一方で、その「言い直し」及び言葉の選び方については細かく注意を払いたいと思う。

多くのことを語って説得力を持つのは、実は内容よりむしろその「言い直し」であると認識するからである。『阪神見聞録』においては、「見聞」の「内容」よりもその「言い直し」に意味があると思われる。後の章で本文を示し

それを指摘してゆきたい。

本文は、

馬鹿なのかづうづうしいのか、そんな遠慮をしてゐる者は一人もない。(略)

要するに東京に比べて、市民全体の公德心が薄いのではあるまいか

と進められ、

私はいつぞや上方の喰ひ物のことを書いたから、今度は人間のことを書いてみた。

が、斯うして見ると、人間の方はどうも喰ひ物ほど上等ではないやうである。

と、しめくくられる。

このしめくくりの直前に、「六甲の苦楽園」(兵庫県武庫郡)の共同温泉におけるエピソードがある。このとおり、舞台は兵庫県であるが、「大阪人」の所行という書かれ方がされている。「つい鼻の先で」「ホレ、此の方が谷崎さんや」「ふうん、さうだつか、此れが谷崎さんだつか、偉いお方やな」と「人の顔をみては感心」する様子を、「無遠慮」で「チロチロ視詰めて」と表現している。そして、それを「まるで品物の値踏みでもするやうに」と指摘し、人を「品物」扱いする関西人の非礼を批判する。

それを受けてか、このしめくくりで「いつぞや」「喰ひ物」を書いたので「今度は」「人間」と「物」と「人間」を並べている。そして、並べるだけでは飽き足らず二つを「比較」し、その結果、「喰ひ物」の方が「上等」とする。これは、人間を「品物」扱いする非礼に対する、先を受けての趣意返しであろうか。趣意を果たした、みごとな切り返しである。

この随筆は「見解」が極めて明解で一貫性があるので、関西人に対する認識がどのようなものであったか重ねて説明する必要もその余地もないと思われる。

しかし、この作品のもう一つの意義は別にあると思われる。本論ではそれを明らかにしたい。それは、直接的になされている関西批判にあるのではない。本論で着目するのは、それによって引き出されてきている谷崎の「江戸っ子」意識の方である。

つまり、「関西」を書こうとした動機が、結果的に谷崎の「江戸っ子」としての自負を書かせることとなったと言いたいのである。題材に「関西」を選びながら、作中に示されているのはまちがいに「東京人」の意識である。

『阪神見聞録』は、直接的には「関西」を描きながら、その実、谷崎の「江戸っ子」意識が強く押し出されたものであると本論にて主張したのである。

一、『阪神見聞録』全文分析

『阪神見聞録』には、文章にあるひとつの法則ができています。

その法則とは、「見聞」的記述のあとに、合わせて「見解」的記述が添えられていることである。このことは、「見聞録」とカテゴリーを冠する以上、奇異な形式ではない。しかし、注意すべきはその「見解」が「東京人」へ向かって展開されていることである。また、その「見解」が「東京人」としてのそれに立脚していることが重要な特徴である。

本論ではこれを重要点とするので、「見聞」内容つまり描写内容自体の批評・詮議はさほど意味をもたないと考えられる。しかし、描写「内容」の詮議は省くが、描写「方法」には注目する。この描写方法つまり言い回しこそが意識の

あらわれと考えるからである。重要な糸口と見なすからである。

このように、この検討では「見解」部に重点を置くわけであるが、それは言い換えれば「見聞録」たる『阪神見聞録』自体の「見聞」部分よりも「見解」部分により重要性を感じるからである。

つまり内実は、「見解」部分のウエイトが高く、「見聞」部分は機能的にいうと「見解」部分を引き出す導入部としての役割を担うものとなっていると私は理解する。「見聞録」という本来のカテゴリから見れば、実に内実は逆転した構造になっていると言える。

次におこなう全文分析は、以上のことを説明するのに有効と考え試みた。

「見聞」と「見解」は同一文内に含まれるものもあり、対象が文章ゆえ物理的に厳密に分解することはもとより不可能であるが、ここでは両者を対比させることを目的とするものであり、物理的な文章分解を目指すものでないことをご了解頂きたい。

(傍線：筆者)

「見聞」的要素を強く含む記述	「見解」的要素を強く含む記述
<p>大阪の人は電車の中で、平気で子供に小便をさせる人種である</p> <p>事実私はさう云ふ光景を二度も見ている。尤も市内電車ではなく、二度とも阪急電車であったが、</p> <p>一度は何でも、宝塚で菊五郎の道成寺を見た帰り途の、満員の電車の中だった。車台の中央の吊り革にぶら下がつてゐると、何處かでシヤアシヤアと放尿する音が聞える。そのうちに</p>	<p>——と、かう云つたらば東京人は驚くだらうが、此れは嘘でも何でもない。</p> <p>此の阪急が大阪付近の電車の中で一番客種がいいと言うに至つては、更に吃驚せざるを得ない。</p> <p>此の女性の不作法は素より論外であるとして、私の不思議に思つたのは、此れを見ている車掌もお客も、別に咎め立てをしなればかりか、不愉快な顔つきをするのでもない。何しろ立錐の</p>

足元へ水が流れて来る。変だなと思ふと、真つ黒な人ごみの、ぎつしり詰まつた二三人の頭越しに、一人の女親が三つ四つの幼児を抱いて蹠蹠まつてゐるのが眼に留まつた。

二度目の時もやはり満員の電車だつたと覚えてゐるが、それも女親が幼い子供に、小便でなく糞をさせてゐた。念入りにも車台の床へ新聞紙を敷き、その上へさせてしまつてから、今度は新聞紙を手で摘み上げ、お客の鼻先へ高々と翳して、雑踏の間を辛うじて分けながら、窓の外へ捨てるのである。

余地もない中で、うずくまつてゐるのさえが不都合であるのに、近所の人にはシヤアシヤアの飛ばつ散りぐらゐうけるだらうが、誰も平気で、全く無感覚な様子をしてゐる。
宝塚のお客が斯う云ふ人種の集まりだとすると、菊五郎がイヤ氣を起こすのも尤も至極と云ふべきである。
甚だ尾籠なお話で、東京人には恐縮であるが、此方の人はいんな事を何とも思つてゐないらしい。

冒頭「見聞」部分であるが、「子供に小便をさせる」行為に「平気で」を加える。これはその「見解」を以て加えられた脚色である。客観に終始した写し取りとは判じきれない。果たして実際に全く「平気で」あつたか、「大阪の人」すべてが慣習的にとる行為であつたか、疑問もあり断言しかねるが、実際に言葉どおり谷崎自身も果たして「大阪の人」すべてが慣習的にとる行為」であると真に解釈してゐたのかというのと同様に判じかねる。それゆえなおさらに「平気で」「人種」といった言葉の選び方に皮肉めいた意図を感じ、強い批判精神を読み取るのである。そして、それを訴える先は「東京人」である。この矛先は、当然自分と同様の素地を持つ「東京人」という「同類」であるという自負に基づき、暗黙の了解をもつて違わず賛同を得られることを前提として「同類」に向けられている。「東京人」という類に自らも属しているという自負が、半ば呆れながら「大阪の人」を対岸において此岸のグループとは一線を画するという意識で「人種」という呼び方をさせている。そしてそれはさらに、こういった「人種」ではない「東京人」に（間違いなく賛同を得ることを前提として）同意を求めるといふ段取りを重ねることで強調される。

また、同乗の人間の「無感覚」な「不思議」と映る反応についてもしかりである。字面においては全くまつとうな

感想であるが、それをたまたま当地で偶発的に起こった特例的事象とせず、普遍的事象であると「断定」して書いている点に注意したい。

「車掌もお客も、別に咎め立てをしないばかりか、不愉快な顔つきをするのでもなく」「誰も平気」で、「全く無感覚」とするのは、ある意味谷崎の目を通した解釈であつて、前例と同様に果して大多数の「大阪の人」が「普遍的」に「一般的」なことと処理していたにちがいない、と谷崎の中で理解されていたかということを検討しても、その衝撃を表すための脚色の色が濃い。同様に「斯う云ふ人種」という指し方も批判的精神の込められた主観的「見解」のなせる技と言える。

また、女性客が「子供に」「糞をさせ」る場面では、「念入りにも」「お客の鼻先へ高々と翳して」という言い回しを加えることでその行為をきわだたせるといった皮肉めいた意識を読み取れる。そして「甚だ尾籠なお話で、東京人には恐縮であるが、此方の人はこんな事を何とも思っていない」という「断定」をやや慇懃な前置きをした上で、「東京人」へ語りかけている。「話」には「お」をつけて差し出し出している。

大阪から汽車で京都へ行つた時、二等室に若い夫婦が乗つてゐた。そして生後一年ぐらゐの乳呑み児を頭の上の網棚へ乗つけて、下から笑ひながら見上げてゐた。「塩梅よう乗つとる」とか云ひながら。

——此れなんぞは無邪氣でいいが、前の尾籠な事件と共に、東京の電車や汽車の中では見られない凶である。東京の常識では、かう云ふ人の心持ちは判断が出来ない。ちよつと外国の風俗習慣を見るやうな気がする。

「前の尾籠な事件と共に、東京の電車や汽車の中では見られない凶」と表現するが、自身の「常識」である「東京の常識」では「かう云ふ人の心持ちは判断が出来ない」というのはいうまでもなく、「判断」領域を越えている要因はその判断「力量」の不足ゆえという意味ではもちろんない。さらに、「外国の風俗習慣」というのももちろんエキ

ゾティシズムを指すのではない。「論外」を意味する。「前の尾籠な事件」共に、「東京の常識では」「判断が出来ない」内容の行為をさして、それを「かう云ふ人」たちの「風俗習慣」と見なしているのも批判的な断定である。また、「外国」という比喻も、資質的に理解を越えた「異質」な「人種」を受けての恣意的表現である。

その意味において、「凶」というつきはなした表現は同類として融合しないという意味合いのものを「観察」するといった意識のあらわれであり、それを「見たり、聞いたり」する、つまり「見聞」するスタンスにあるのはその認識の正しい表現といえる。

たとえば私が大朝と大毎の夕刊を買つて乗り込むとすると、孰方か一つ、私の手に取らない方の新聞を、ちやんと眼をつけて直ぐに借りにくる。而も遠くから、人ごみを分けてやつて来て、煙草の火でも借りるやうな風で、「ちよいと拝借」と、訳なく借りて持つて行つてしまふ。さうして雑踏の中であるから、もうその人は何處へ行つたか、姿が見えず、貸したが最後向うから返しに来てくれる迄ボカンと待つより仕方がない。マゴマゴすれば自分の降りるべき停留場へ来て、とうとうそれは取られつ放しになることもあり得る。

ヒドイ奴になると、一度私はこんな目に遭つた。ある晩梅田で大朝と大毎の夕刊を買つて、阪急に乗つたが、少し酒を飲んで

大阪の人——それも相当教養のあるらしい、サラリーメン階級の人々——は、電車の中で見知らぬ人の新聞を借りて読むことを、少しも不作法とは考えてゐないやうである。それも長い汽車の道中とか、つい隣席にある人の物なら分つた話だが、大阪人のはその借り方がいかにも不躰で、ぶうぶうしい。

僅か一枚の新聞であるが、貸す方の身では自分が買つてまだ眼を通さないものである。私がかから借りるとすれば、相手がつつかり読み終わつて、次の新聞に移る迄は差し控へる。然るに大阪では、馬鹿なのかぶうぶうしいのか、そんな遠慮をしてゐる者は一人もない。

でゐたので、乗り込むと直ぐ好い気持ちに居睡つてしまつた。すると暫く立つてから、「もしもし、もしもし」と、ガンガン云ふ声で耳元で怒鳴る奴がある。——多分私は肩を持つて揺すられたやうに記憶してゐる。——ふと眼を覚ますと一人の紳士が傍らに立つて、「一寸夕刊を拝借します」と云つてゐる。私は眼を擦りながら、「はア」と夢現で返事をしたが、さアそれからは眼が冴えてしまつて、どうしても寝られない。仕方がないから新聞を読まうとすると、さつき紳士が二枚とも持つて行つてしまつた。何分寝惚けてゐたものだから、それがどんな男だつたか、キヨロキヨロ見回してもよく分らない。そのうちに夙川へ来る、蘆屋川へ来る、いよいよ次ぎの岡本で降りようと思つて立ち上がると、やつとその男が返しに来た。見れば四十恰好の髭を生やした紳士だつたが、

或る時私は、わざと一枚貸してやつてちやうど続き物のまん中あたりを読みかけた時分に「何とぞお返しを願ひます」と云つてやつたら、相手は渋々返した。私は胸がすつとして、日頃の恨みを晴らした気がした。

此奴の方では恐らく私が眼を覚ましたのを平気で読んでゐたに違ひないのだ。

それがあんまり忌ま忌ましかつたから、以来私は時々意地の悪いことをして、腹いせをしてやる。一枚を読んで一枚の方を特にれいれいしく膝の上に載せて置く。すると必ず「拝借」と来るが、「これから読むのですから」とキツパリ断る。既に読んでしまつた方でも「まだ読むところがありますから」と言つてやる。

此の時ぐらゐ痛快だつたことはなかつた。阪急の梅田では、電車の中へ夕刊を売りに来るのだから、買う機会はいくらもある。それを買はずに人から借りて読むことに極めてゐるやうな連中には、此のくらの手厳しくしてやつて恰度いいのである。

「大阪の人」とことわった上で、「それも相当教養のあるらしい、サラリーメン階級の人々——は、電車の中で見知らぬ人の新聞を借りて読むことを、少しも不作法とは考えておないやう」であるとし、「大阪人」のはその借り方がいかにも不躰で、ぶうぶうしい」と批判する。説明は不要であろう。ここでも気がつくのは、次の言い回しである。

「ちやんと」眼をつけて「直ぐに」借りにくる。「而も遠くから」「人ごみを分けてやつて来て」が恣意的である。また理解に苦しむような行為を実に「訳なく」やつてのける、とする。「馬鹿なのかぶうぶうしいのか、そんな遠慮をしてゐる者は」「一人も」いないという。「一人も」というのは、データではない。主観による強調語であり、その意味でこの部分は「見聞」ではなくむしろ「見解」といえる。

そして、どれほどの度合いであつたか、新聞を借りにきた男性から受けたというその行為はフィルターを通すと、「ガンガン」「怒鳴る」上に、「肩を持つて揺すられた」と認識されている。貸した新聞を貸主が降りるまで読んでいた男性は、「恐らく私が眼を覚ましたのを平気で読んでゐたには違ひない」と断定する。これも「見聞」でなく「見解」といえる。

また、「必ず拝借と来る」という断言。「わざと」「貸してやつて」「云つてやつた」「してやつて」という言い回し同様、「日頃の恨み」「痛快」という直接的な表現、さらに「此奴」「連中」ともども「相手」という言葉の用い方も「敵」を連想させるものである。

また「このくらい手厳しくしてやつて恰度いい」という理由は、相手が「買はずに人から借りて読むことに極めてゐる」からであると断言している。この「極めてゐる」いうのもデータではない。「主観」による断定である。ここでは「連中」という呼び方がされる。

電車でもう一つ気が付くのは、満員の場合に大勢の人が立つてゐながら、座席の方はいつも大概余裕がある。

融通すればまだ一人二人掛けられるのに、誰も席を空けてやらない。甚だしきは「もう少し孰れかへ寄つてくれ」というと、怒る奴さへある。荷物を脇へ置いてゐる者が、決してそれを時分の膝へ上げようともしない。いよいよ鯨詰めになつて来ると仕方がなしに、ただその荷物を傍らへ寄せ付けるばかりである。

「座席」に「大概余裕がある」の前に、「いつも」が付加されて「いつも大概」と重ねている。また、「誰も」「空けてやらない」、「決して」「上げようともしない」、そして「仕方がなしに」しかしながら「ただ」「寄せ付けるばかり」と効果的な強調がみられ、いたずらに抵抗する様子を表現している。このあたりの言い回しはユーモラスでのを得てもいるが、かなり露骨な蔑しさも読みとれる。

○

一体に、東京人は見ず知らずの人に向かつて話しかけることはめつたにない。それは不作法なことであり、田舎者のする事だとしてゐる。大阪人はこの点に於いて東京人ほどはにかみ屋でなく、人みしりをしない。ある場合には却つてフランクでいいこともあり、寧ろ美点であるのかも知れぬが、これがやつぱり東京人にはぶうぶうしく見え、不愉快でない迄も「非常識な」と云ふ感じを与へる。

六甲の苦楽園にゐた時、或る朝ラジウム温泉の共同風呂へ這入りに行くと、私より先に這入つてゐた商人風の若い男が、やがて私と入れ代わりに湯から上がつて、戸外へ出て行つたかと

思ふと、直ぐ又それとよく似た男が這入つてきて、着物を脱いで、素ツ裸になつて、私の漬つてゐる湯槽の中へ飛び込んだので、「オヤ、此れは今の男と違ふのか知らん？」と思つてゐると、その男はニヤニヤしながら、「失礼ですが、あなたが谷崎さんですか」と云ふ。さうだと答へると、ははア、左様で。——
 実は何です、今門口で谷崎さんは此の温泉へおいでにならんかと聞いてみましたら、今お這入りになつてゐるのが谷崎さんだと伺ひましたんで、ちよつとお目に懸かりたくつて、もう一度風呂へ這入りに来ました」と云ふのであつた。しかしこれなどは非常識でも愛嬌のある部だが、これもやはり同じ風呂場である朝私が湯槽の縁にしゃがみながら、湯を浴びていると、中に漬かつてゐる二人連れの男が、つい鼻の先で、此方を無遠慮にチロチロ見つめては話をしてゐる。

「ホレ、この方が谷崎さんや」「ふーん、さうだつたか、此れが谷崎さんだつたか。偉いお方やな」と、まるで品物の値踏みでもするやうに、人の顔を見ては感心してゐる。

そのくらゐなら「あなたは谷崎さんですか」と呼びかけてくれる方がまだいいのだが、決して直接には話しかけない。何とも氣味の悪い次第であつた。

ここの「見解」部、特に冒頭部はもつとも評論としての公正度が高い所であろう。主観的見解部も先のロジックをおくことにより、正当性をもつことになる。

しかし一方で、そのロジックで「大阪人は」と特定し、その特質に触れたあとで、論じるのは「六甲の苦楽園」での男の所行なのである。ここが重要である。

「六甲の苦楽園」の「ラジウム温泉」というのは現西宮市苦楽園にあつた温泉をさす。

昭和13年の阪神大水害で、湧いていたみょうばん温泉が出なくなり閉鎖されたが、大正初期に開設されたこの温泉は大盛況を博していた、とある（『阪急コレクション』阪急電鉄著作発行）⁽¹⁾。

前記したが、谷崎は大正12年12月に「苦樂園」に転居している。二度とも「或る朝」とあるが、「六甲の苦樂園にいた時」とある。

当時は兵庫県武庫郡といいおのずと兵庫県下である。「六甲の苦樂園」を「大阪」と呼ぶことはない。ここで居合わせた男の不作法を書いていることになるが、やはり最初に「大阪人」とことわっている。

一度目は「或る朝」、二度目のエピソードも「或る朝」の出来事としている。朝から温泉に来るのが可能なのは、地元住民または宿泊中の旅行者である場合が多い。そういう概念を抜きにしても、特に文中の男性を「大阪」の住人または旅行者と特定するに結びつく記述はない。ここでは、感覚的には「地元」の人間と捉えられていると推測される人物をさして「大阪人」と呼んでいるという仮説が成り立つ。

この仮説は、この部分で初めて当てはまるものではない。実は、これより先にすでにみられている現象なのである。次の章にて、それを明示し説明してゆく。

○

	<p>私はいつぞや上方の喰ひ物のことを書いたから、今度は人間のことを書いてみた。 が、斯うして見ると、人間の方はどうも喰ひ物ほど上等ではないやうである。</p>
--	--

「いつぞや」「喰ひ物」を書いたので、「今度は」「人間」にした、ということ、ここで両者を並列にしている。そして並列したあとでさらに比較検討をほどこし「喰ひ物ほど上等ではない」と評価を下しているわけである。

ユーモラスであるが、直前部分の温泉でのエピソードで「大阪」の人に対して「品物の値踏み」をするような非礼

を批判しているが、本稿「はじめに」で示したように、それに対する趣意返しの意味がこめられているとすれば、これは高等な切り返し方である。また、かなり厳しい。

二、仮説提議——「大阪」が大阪ではなかった可能性

「大阪」の意味するもの

(1) 舞台が大阪でなかった可能性——「大阪」の「混同」

先の全文分析にて、「六甲の苦楽園」でのエピソードを挙げて地名の齟齬の可能性を指摘した。

実は『阪神見聞録』内にはそれより前の部分からすでにその傾向が現れている。これは、単なる混同とみなされるようであるが、この混同に至るといふ経路自体に『阪神見聞録』の意義とも言える深い意味があるとは言えないだろうか。本章ではその「混同」について追究してゆきたい。

冒頭に「大阪の人は電車の中で、平気で子供に小便をさせる人種である」とあり、そう述べる根拠が二例挙げられている。そしていずれも電車は「阪急電車」であったと明記されている。

ここで「大阪の人」としているが、その場面が大阪でなかったという可能性がある。与えられた「大阪の人」という指名をはずせば、描かれたエピソードが実は大阪ではない場所で起こっていたという可能性があるので。

二例のうち、後者には場所の特定につながる記述がない。そのうち「一度」目の前者のエピソードであるが、「宝塚で菊五郎の道成寺を見た」「帰り途」とある。

当時、阪神急行電鉄（本文考証に関しては、本文のまま「阪急」を使用する。）の「宝塚」駅は路線内の終端駅（終着駅）であり、そこからは「梅田」駅（大阪市）に向かう当時の宝塚線と、「西宮北口」駅（西宮市）に向かう当時の西宝線の2路線が出ていた。阪神急行電鉄の路線状況については、阪急電鉄株式会社（著作）発行の『阪急コレクション』（前掲注①）に詳しい。後の、これも同じく「阪急」電車内で男性が新聞を借りに来るエピソードがあるが、この際、「酒を飲ん」だ「晩」とあり、降りる駅は「岡本」であるとしている（以下、本文に伴い駅名は「」で示し「」駅を省く）。

「宝塚で菊五郎の道成寺を見た」「帰り途」とあるのが、「自宅へ帰る」という無意識な通念的解釈を促しているのが現状であろうが、当然ながら「帰り途」が必ず自宅を指す「帰り」であり、さらにそれが「岡本」方面であるという100%の断定はできない。ひとつの仮定として説明する。

谷崎は大正12年9月の関東大震災避難時に芦屋市の友人宅に身を寄せた後、10月と11月は京都に住むが、12月に兵庫県武庫郡六甲苦楽園に転居する（阪急電車の最寄り駅は「夙川」13年3月現岡本への転出後の10月に現・甲陽線である甲陽支線「夙川」―「甲陽園」が開通となったため、当時点では未通。「苦楽園」が開設されるのは大正14年3月）。翌13年3月に兵庫県武庫郡本山村北畑に転居（阪急電車の最寄り駅は「岡本」、翌14年10月同本山村内で本山村岡本好文園に転居。ちなみに『阪神見聞録』初出は『文藝春秋』大正14年10月号である。転居等は永栄啓伸氏の『評伝 谷崎潤一郎』年譜に詳しい^②）。

「岡本」及び「夙川」（「岡本」より二つ手前に位置する）は「宝塚」をはさんで、東方に位置する大阪とは反対方向の西方に位置し、「宝塚」から「阪急」を利用して向かうと大阪と呼べる場所を経由することはない。唯一、たまたま避難同年の10月～11月に京都より「宝塚」に向向いて来ていたのだと限定すればこの限りではない。しかし、この場

合は、当時阪急電車は現在ある京都線が未開通であったことを念頭におく必要がある。「宝塚」から京都へつながっていたのは、現JRの国鉄だけである。明治32年に「宝塚」を含む「福知山」―「尼崎」(明治40年に国鉄福知山線と改称)が開通したことで、東海道線とつながり、京都方面へ直結することとなる³⁾。一方、「阪急」は昭和3年に「淡路」(大阪)―「西院」(京都)が開設した時点で、初めて、大阪―京都間が結ばれたことをもって先行の宝塚・神戸と一連となる。ゆえに「帰り途」にあえて宝塚から京都に通じる国鉄で「帰」路にいたのでなく、国鉄ならぬ「阪急」「宝塚」に行き「阪急」電車にのつていたという設定が必要である。この特別な設定を除けば、前記のとおり、その経路で通過する何れの市も兵庫県下にあり大阪にまたがることもない。

特定されている「阪急」電車を使って、当時「宝塚」から「岡本」に行くには次の経路となる。「夙川」は「岡本」の二つ手前に位置する。「宝塚」から西宝線(現在の今津線の前身。大正10年、「宝塚」―「西宮北口」開通。大正15年「今津」開設と同時に今津線と改称した。)で当時の神戸本線と接続する「西宮北口」まで行き、そこで「梅田」から「神戸」へ向けて西へ走る路線・当時の神戸本線に乗り換えて、後半部に出てくるが、「夙川」に来る蘆屋川へ来る、いよいよ次の「岡本」のとおり、西へ3駅行くのが一般的*である。これ以外は不自然な迂回になるので常識的という方が正しいと思われる。(※他方の路線・宝塚線を経由すれば次のようになる。「宝塚」から「岡本」とは反対方向の大阪方面つまり、東方へ行き「十三」(大阪市)もしくは「梅田」(大阪市)で乗り換え、今度は逆に西に向かう神戸本線で「西宮北口」に取って返し、「西宮北口」を通過して3駅目の「岡本」へ行く方法もあるが、これは宝塚市より西に位置する岡本へ向かうのに、まず反対方向である東へ移動するという奇異な行為をとることになる。そして移動した分、また西へ戻るという意味不明な徒労を要することになる。西へ向かうのに、逆の東に移動してから引き返し、改めて西へ向かうという理屈である。現JR東京山手線や大阪環状線上で、3つ先又は隣の駅に行くのに、目的地と反対方向へ廻って向かう理屈に似ているが、これよりも無意味な徒労を要す。)

そのように不自然ながらあえて大阪向きの路線に乗ったと仮定すれば、形だけは大阪を經由することができる。しかし、そうなると今度は「帰」路とは反対の方向にいたり、本文にあるように「帰り」という言葉は用いられにくいことになる。とすれば、この「電車」というのは阪急「宝塚」発の「西宮北口」行き電車をさしている可能性が高い。

この「帰り」という言葉が、特別に「目的地」だけに限って向けられたものと仮定して、「宝塚」での観劇後、目的地へ「向かう」という概念に対する使われかたをした「帰り」であるなら、自宅に「帰」らず「宝塚」より反対方向である「梅田」行きの路線に乗って、自宅から遠ざかる形で大阪へ出向いた、または、「西宮北口」での乗り換え後、同様に一つ目の「夙川」または3つ目の最寄り駅「岡本」と反対方向の「梅田」行き電車に乗って自宅から遠ざかる形で大阪に向かったと想定しなければ、「大阪」と呼べる空間は通過することがないわけである。

ゆえに、この電車内でこういう行為をした人間が、面識もなく、身元が判別してないのであれば、おのずと「大阪の住人」（であるから「大阪の人」という呼び方をする）という概念は付加されていないはずである。

西宝線上の「宝塚」（宝塚市）から「西宮北口」（西宮市）間の出来事である可能性があり、さらに先のように「西宮北口」での乗り換え後、「夙川」（西宮市）及び、「蘆屋川」（芦屋市）、「岡本」（神戸市）までの車中であると仮定しても、何れの市も兵庫県下にあり、おのずと大阪とは呼ばない地域である。

つまり、宝塚または西宮市内及び他二市内（芦屋・神戸）での出来事であると解釈でき、おのずとその近隣地の住人である可能性がある。「大阪の人間が乗り合わせた」結果この地に乗り入れているという特別な想定がなされていないと仮定しない限り、その人物が「宝塚」でなく「西宮」でもない「大阪」の人と断定できるとも限らないのである。また、そのような特記すべき想定がなされていたということを証明できるような記述は無い。

さらに「西宮北口」での神戸本線の乗り換えも、「帰り」という概念から推測すると自宅に向かう西行きの神戸方面に至る電車に乗ると解釈するのが順当である。自宅とは逆方向となる東向きの「梅田」(大阪)方面電車へ乗らない限りは、「大阪」と呼べる空間を経由することはありえない。本文より、この人物が大阪出身者と特定することも不可能である。

つまり、谷崎は「大阪の人」と呼んでいるが、その場面は「大阪」であった可能性は低く、宝塚市内他の「大阪以外」の空間における出来事であったという仮説も可能性の一つとして成り立つことになる。

つまり、「大阪」ではない土地で起こったことが、「大阪の人」を主語として「大阪の人」の諸行として認識されていた可能性があるといいたいのである。

同様に、「新聞」を「づうづうしく」借りにくる男性のエピソードがある。ここにも、「大阪」というひとくくりな使われ方が見られる。

「ヒドイ奴」に「こんな目に」「遇」わされたのは、「阪急」「梅田」で「乗った」電車内とある。ここでいう電車とは「梅田」から「神戸」へ向かう阪急神戸本線を走る車両を指す。「晩」とあるため、その乗客である男性を出勤途上と見なしたとは考えにくい。とすればその男性は同乗する谷崎の目には勤め帰り、つまり、大阪方面の職場または出先より、神戸方面に向かって走る電車で帰路につく人物といった漠然とした理解がされていたと推測できる。すでに電車は大阪を去り、西宮市内を通過し、さらに芦屋市内へ乗り入れているわけである。「夙川」(西宮市)「蘆屋川」(芦屋市)を越えてもまだ下車しない、次は「岡本」(神戸市)である。おのずとその先の帰宅途上にある人物と映っていたと思われる。ここでも、大阪の人間が現時点から(帰途でなく)「所用で神戸方面に向かう」途上にある、と想定

した捉え方をしていたという難解な解釈をしない限り、谷崎の目には、大阪市を越し尼崎市、西宮市、芦屋市を過ぎ、神戸市内に入る電車内に乗り合わせた人間、つまり神戸市以西の住人と無意識に捉えていたと思われる。同様に、その難解な解釈を主張するための記述も存在しない。ここでも、その人物を指して「大阪人」と呼んでいるわけである。

この男性に関しては、「大阪に勤める人」をさして「大阪の人」と呼んでいるともとれ、奇異ではないが、右を説明しておく。

(2)「大阪」の使われ方——「大阪人」の意味するもの

以上のことから判断すると、『阪神見聞録』における「大阪」の用いられ方・その法則であるが、結果としてみればどうやらここでいう「大阪」というのは地域を特定するという第一義的な目的で用いられているのではないようである。結果として、ここでの「大阪」はそれに該当する「空間」または「地理」を特定する目的で使われていない。該当する地域を正しく指すためのものではないということである。

なぜ「大阪」とひとくくりになっているのだろうか。これを単なる混同として済ませる方法がある。しかし、全編を貫く語気の強い「見解」と無関係と見なしてよいのだろうか。何らかの関わりがあるとは言えないだろうか。「見解」において、その表現方法や言葉の用いられ方を無関係としてやり過ぎすことは浅薄である。言い回しや言葉も必ず連動性を持つものであるはずだ。その相乗効果を得て作品の意義はより重いものとなるはずである。この立場から一つの仮説を立てたい。

その仮説とは極言すれば、この場合、「大阪」というのはむしろ「地理」をさすのではなく「人」を指しているよう

であるということだ。先の考察から割り出すと、「大阪」という語の用いられ方というのは、特定される「エリア」を指すのではなく「さう云ふ言動に出る」人々（「人種」という言葉が出てくる）をさして表現したい場合に使われているようだとすることである。『阪神見聞録』は、不幸にも人々の不躰な言動に続けて遭遇し、その違和感を唱えているわけであるが、ここでの「大阪人」は内容的には「関西人」を指している。「東京人」からみて違和感を感じさせる言動をとった人々、つまり「東京人」に対しての「関西人」。その「関西人」を表そうとするときに、「大阪（の）人」とスライドされているのである。いわば「大阪人」とは「東京人」と一線を画するための呼称である。単なるひとくくりな混同、と言ってしまうはそれまでだが、「東京人」と区別するための「関西人」を指す「大阪人」が使われているならば、混同にはちがいないが、その背景に、厳密に地理を区別する必要性が認識されていないか、といったのも理解できる。

「東京人」に対しての「関西人」、を示すものであるなら、「大阪人」というのは「東京人」に対比させるために用いられる呼称とも言える。「東京人」との区別化をさせるのがその第一目的であるとするならば、つまり、その目的に有効にはたらいていさえずれば、「関西」エリア内における細かい分別は不問のものとなる。この意味においては、文中において「大阪人」でも「東京人」との区別は充分明確に示されており、目的は目減りすることなく果たされているといえる。つまり、「さう云ふ言動に出る」人々「大阪の人」と置き換えられているのである。この置き換えをして読めば、「見解」はさらに明解なものとなる。主張は明確な一貫性をもってくる。もとより、地域の特定を指すものでないため、その齟齬をつきつめることは無意味である。

ここで使われる「大阪」は、本来地名でありながら、用途は「特質」を表したい場合に使う用語として認識されているという仮説を立てたいのである。一語ながら概念をあらわすメタファーであるため、地名としてのカテゴリーに

ある本来の「大阪」として扱おうと、その直訳的な意味合いの齟齬を生じる。また、主張もあいまいなものとなる。そしてその地理用語としての単なる「混同」として処理すると、つまり単なる「落ち度」といった傾向を付加させるだけに終わる。「見解」と連動性しない、また単に「見解」の反映を受けないものとしてそれぞれを単体として見なすと、その作品価値を曖昧なものとし過小評価してしまうことにもなる。『阪神見聞録』に見られるこの「混同」を、作品の主張する「見解」のなせる現象と評価すれば意義も増す。この仮説を支持すれば、「見解」の発表という実験は、期待通りの現象を生んでいたという指摘ができる。

この「大阪」の混同に関しては、今まで「混同」としか言及することができなかった。しかし、今回の考証で、その「混同」の起こった原因の一つは究明できたように思う。「東京人」に対する区別化を目的とする用語として「大阪人」が用いられているとすれば全編読み直せば、その目的は充分果たされているといえる。この目的が果たされてさえいれば、「東京人」としての「見解」は十分に成立し、さらに、「見聞」部における細かい用語の齟齬はこれを損なうものとはならないのである。

つまり、全編にみられる「見聞」部での齟齬が問題にならないということは、本来の「見聞録」としての機能は不問ということである。さらに、著者の意識としては以上のように「見聞」部、つまり「東京人」と「関西人」の区別化を明示することにウェイトが置かれており、必ずしも「見聞」記録としての完成度を求めたものでないことが読み取れる。

ゆえに、「見聞録」でありながら「見解書」としての意義が強いと主張したのである。

この「大阪」のひとつくくりな「混同」は、無意識であったにしろ、「地理」の判別がつかないのではなく、意識下にあるものを表現するメタファーとして認識されているため、その意識が優先された結果このような用いられ方がさ

れたのだとしたい。

また、無意識であった結果としてこのような「混同」がみられたということは、その認識が図らずも吐露されているわけであり、なおさら興味深い。

ま と め——「江戸っ子気質」

以上の理由で、本論では「見聞」内容よりも「見解」に重点があるとした。

事実関係の考証よりも、「見解」とその言い回しにこそ読み取れることは多い。カテゴリーの枠を外して、その機能を問うと『阪神見聞録』はその普遍性及び一義的な「見聞録」としての機能よりも、作家自身の個人的「見解」を理解する「見解書」としての有効性のほうが高いと言えよう。

『阪神見聞録』に見られる「見解」は一貫性があり明解で分かりやすい。しかし、この「見解」がどのようなモラルや見識に基づいているか列挙し、完璧に網羅するのは困難である。

しかし、ただ一つ、またその一言ですべて説明のつく言葉がある。それは、他でもない「江戸っ子気質」である。これが基盤であるとすれば、すべてをカバーすることができる。『阪神見聞録』は「江戸っ子気質」が書かせたと云っても過言ではない。

「見聞録」と題しながら、その実、機能的には「見解書」の要素が強い。「見聞録」といいながら、強く押し出されているのは「見解」の方である。ここでの「見聞」は機能上その糸口的存在であるとも言える。

つまり、『阪神見聞録』は「阪神」の「見聞録」とならず、「江戸っ子」の「見解書」となっていると云えるのだ。「阪神」と冠しながら、強く押し出されているのは「江戸っ子」としての自負である。

それは関西に身をおくことで、却って呼び覚まされて、強く自覚されたとはいえないだろうか。関東大震災による関西移住前、在京時は必ずしも谷崎は精神主義また清貧主義の傾向が強い「江戸っ子」氣質を尊重していたとはいえなかったからである。

後に谷崎の関西理解、または賛美者として、貢献者として、その造詣の深さは高い評価を受ける。しかし、それは多田道太郎氏⁽⁴⁾が述べるように「外部」の人間としての目をもってしたからこそ関西人の見えないものが見え、見過ごす点に気づき得たからこそ出来た偉業であるともいえ、矛盾するようであるが最後まで「江戸っ子」としての資質を失わなかったことがし得た業績とって過言ではないであろう。

『阪神見聞録』は以上の点から、非常に感覚的、主観的な「見聞録」であるといえる。この「見聞録」は一義的な「見聞録」としての価値よりも、「江戸っ子」であった谷崎の「見解書」としての意味合いが強い。「見聞」部全編に見られる用語の齟齬が大勢に影響を与えないということは、言い換えれば「見聞録」としての完成度を問われていないことになる。「見聞録」としてよりも、谷崎の「見解」を確認する上でより高く機能するといえる。一義的「見聞録」の有効性よりも、作家谷崎潤一郎の「江戸っ子」氣質また自負の存在を読み取る上での「見解書」として高い有効性をもつと言える。その谷崎の業績の全体像を踏まえる上でも、『阪神見聞録』ではまだこの時点で生粋とも言える「江戸っ子」氣質が健在であったことの証明であり、またそれがストレートに提示されているのは貴重である。

彼が後に関西と切り離すことのできない文学的業績を残すことを考え合わせれば、この通過点が存在したことは非常に興味深いことである。

註(1) 『阪急コレクション』(阪急ワールド全集①) 阪急電鉄株式会社コミュニケーション事業部・著作発行二〇〇〇年十月

- (2) 永栄啓伸『評伝 谷崎潤一郎』和泉書院 一九九七年七月
(3) 川島令三『全国鉄道事情大研究』草思社 一九九二年三月 過去から現在に至る鉄道事情が詳しく説明されている。
(4) 多田道太郎「西と東の章」(『関西——谷崎潤一郎にそって』筑摩書房 一九八一年十一月
「外から見られている」という感じが確かにある。しかし、だからと言って、関西の人間が関西のことを書いたら谷崎さん以上のものを書けるかという点、これまた疑問です。関西の内側には書けないものがあって、その点、谷崎潤一郎が関西について書き残してくれたことは、ありがたい」とした。

※本文引用

『阪神見聞録』『谷崎潤一郎全集』第二十卷(中央公論社 昭和四三年)

(ふじわら ともこ・関西学院大学大学院文学研究科研究員)